

余命卒業式

高校三年の夏。部活の練習中大怪我をし入院することになった桜太は、同じく高校三年生の真桜と、ひよんな偶然から病院で出会った。二目見たときから桜太が心惹かれるほどに、真桜はかわいらしく、可憐な少女だった。そして、何より同じ「桜」の文字が入った名前に、二人はこの出会いの不思議な絆を感じた。病院の中では常に一緒に居ることが当たり前になり、桜太のリハビリを一番近くで真桜は支えていた。

リハビリを終え、退院した桜太と病院に残った真桜の絆は、その後も切れることなく、いつの日か二人は互いに恋心を抱くようになり交際をスタートさせた。真桜の願いで桜太は真桜を外に出すことが多くなり、次第に桜太は真桜がいつ退院することが出来るのか、真桜の病気は体何なのか、改めて疑問に思い始めていたが口に出せずにいた。二人の温かい交流が重ねられるが、そんな中、真桜が出席日数を理由に高校を卒業できないことを知り、桜太と真桜は「学校の卒業式が終わった後二人だけの卒業式をしよう」と約束をした。

しかし、二人の穏やかな日々にも、とうとう終わりの時が近づいていた。ある日桜太と出かけている途中に倒れた真桜は緊急手術を受けることになった。病院で真桜の親と対面した桜太は「娘と別れてほしい」という残酷な言葉や、「最後」という言葉に異様な胸騒ぎを覚えた。これまで真桜からそんな発言はなかった為、真桜の持っている病気がそんなに重いと知らず、今まで危機感をもっていなかった事に桜太はひどく後悔していた。手術室の前では緊迫感に包まれる中、数時間後無事手術が成功し、担当医がでてきた。その日はもう夜だったこともあり、真桜に会わず、桜太は家に帰ることになった。

少しの時間が過ぎたある日、回復した真桜から連絡が入り、病院に向かう桜太。そこで、悲しい告白を聞かされる。「自分は余命半年である、自分に未来はない、自分とは別れてほしい」と。桜太はその言葉に強く反発し、それを真っ向から否定した。真桜をこれまで以上に支えようと二人の愛の証のために真桜の好きな桜のネクレスをプレゼントした。卒業式当日、真桜の病室で二人で卒業式をしている時だった。真桜がいきなり発作を起こし桜太も何が起きたのか分からず放心状態だった。気がつく、真桜はベッドで永遠の眠りについていた。桜太は絶望感に苛まれていた。ふと彼女の手の平を見ると桜太があげたネクレスが輝いていた。そして視線の矛先の机には真桜が桜太への想いを込めた「最後の手紙」が桜太を待っていた。

ストーリーの展開にメリハリがあり、読者を飽きさせない構成になっています。また、ダイレクトに卒業式をストーリーに取り込むのではなく、「退院」、「別れ」など「卒業式」から思い浮かべるイメージを利用して作成している点も評価できます。

「PAN」

私が映像に興味を持つきっかけとなったのは二〇一五年に制作されたアメリカイギリスオーストラリア合作の冒険ファンタジー映画「PAN」である。

映画のあらすじは、ロンドンの孤児院で院長に目をつけられるほど好奇心旺盛に育った少年ピーターがある日地下室で母からの手紙をみつけた事をきっかけにネパランドへ仲間と共に勇敢な男ピーターパンになるために数々の困難を乗り越え成長していく物語である。私は中学生の時初めてこの作品をみて引きつけられたことを覚えている。

私はその中でも、特に印象に残っているネパランドの描かれ方に注目して行きたい。

舞台となるのはワイナリーブライザーズのリアルステンスタジオのサウンドステージと、ヨーロッパ最大の屋内スペースのひとつカーデイントンスタジオである。監督の指示のもと美術のアリクスボネットが実際にセットを作り出している。劇中に出てくる先住民の街はカラフルなツリービレッジが魅力的だが、モンゴルアメリカナペリカなどの多彩な文化の雰囲気を作り出すためにどんな色にも染められる生地を使用したり、隣接した魅惑の森ネパウッドではカメラの動きを制限されることを嫌い、複雑な通路がいくつも作られている。CGを使用して撮影することも可能だったが、関わらず一からセットを作り上げた事によって二つのアクションに臨場感が出ると同時に視聴側である私たちがネパランドの世界に入ったように作品に溶け込むことができるであろう。

また役の設定が原作やアニメーションとは異なる所もこの作品の魅力の一つである。原作ではピーターパンの敵として登場するフックだがこの物語では若き頃のフックが自由を求めピーターと共に黒ひげを倒し、子供に夢を与え続ける仲間となっている。子供の知性を見くびらず、主人公でさえも完全な善玉悪玉として登場せず、誰もが欠点を持つという原作のスピリットに忠実に留意している中で、原作と大きく変わっているフックの役割、初めて観た時に混乱と共にこの物語は原作とつながっているのかと驚いた。

監督はこの作品について、幼い頃に自分が抱いたピーターパンはなぜ飛べるのか、「なぜネパランドに行ったのか」という疑問に対する答えになるような作品にしたいという。私は今から十三年前、お遊戯会でピーターパンのウエンパイの役を演じた。「大人になっても子供の頃の気持ちを忘れない大切さを知ったわ」という台詞を覚えている。後二年で二十歳を向かえる今「PAN」という作品に出会い、もっと理解できた気がする。

私がこの作品に影響を受けたように、私も人々の心にメッセージを届けられる様な作品をこの作品に初めて触れた時の感動を大切にしたいと思う。

昨年度参考作品

総合型選抜 Ⅰ期・Ⅱ期／社会人特別選抜・帰国生特別選抜

▶ 論述型（課題①：ストーリー創作 テーマ「卒業式」）

「卒業式」

▶ 論述型（課題②：小論文）

「PAN」

作品の印象だけでなく、撮影方法や制作方法まで調査している点は、「PAN」が映像学科を目指そうとした作品であることの説得力として有効です。原作と比較して、異なる点を取り上げていることから、作品を深く理解しようとする姿勢が伺えます。

昨年度参考例題

▶ 企画提案型（身体表現力（朗読））

太宰治著『ア、秋』

芥川龍之介著『奇怪な再会』

課題

映像学科

● 対象選抜区分

総合型選抜 Ⅰ期・Ⅱ期／社会人特別選抜・帰国生特別選抜

● 課題タイプ

論述型（課題①：ストーリー創作・課題②：小論文）、企画提案型（身体表現力（朗読））

● 出題意図

論述型

課題①（ストーリー創作）：ストーリーの構成力、展開力、文章表現力を測るとともに、映像表現としてふさわしい構造になっているかを評価します。

課題②（小論文）：映像は視覚的な情報なので、それを文章としての確に表現し、筆者の論点などが論理的に説明できているかを評価します。

企画提案型（身体表現力（朗読））：文章の一部を読み、描かれた人物、情景、心情などの内容を具体的にイメージしながら、その文章の内容にふさわしい表現の工夫を凝らした朗読ができているかを評価します。

● 評価のポイント

論述型

課題①（ストーリー創作）：例えば皆さんがよく知っている「桃太郎」を例にあげると、「昔、二人暮らしの老夫婦がいる。ある日、おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯にいくと、おばあさんは川で桃を拾ってくる。家に持ち帰ったら桃からは男の子が出てきて、二人は桃太郎と名付けて大切に育てる。やがて桃太郎は立派に成長して、鬼ヶ島へ鬼退治に行く。その道中、出会った犬、猿、キジに持っていたきび団子をあげると家来になって一緒に鬼退治に行き、見事勝利し、鬼が悪行を重ねて集めた宝物を荷車で引き村へと持ち帰る」のように、導入部で「誰が主人公で何をしようとしているのか」、展開部で「どんなことがあったのか」、結論部で「最終的にはどうなるのか」がきちんと書かれていることが大切です。

課題②（小論文）：取り上げた映像作品についてよく調べ、周辺情報についての知識を持っていることがベターです。

企画提案型（身体表現力（朗読））：発声法（エロキューション）の技能ではなく、文章に描かれた人物、情景、心情などの内容を理解して、朗読してもらいます。文章の読解力と朗読を通して、演技者としての身体表現力を問います。

課題内容

総合型選抜 Ⅰ期・Ⅱ期／社会人特別選抜・帰国生特別選抜

希望する領域の課題を選択してください。

〈身体表現領域以外〉

以下の課題①②、からいずれか1つを選択してください。

課題①（ストーリー創作）：「インターネット」をテーマにストーリーを考えて、市販の400字詰原稿用紙（2～3枚）に縦書きであらすじを書いてください。色鉛筆などを使用せず、文章のみで作成してください。

課題②（小論文）：あなたが映像学科を目指そうと思うきっかけとなった映像作品か演劇を1本選び、どうしてその作品が心に残ったのか、あなたがその作品について独自に考えたこと、あなたなりの解釈が明確にわかるように市販の400字詰原稿用紙（2～3枚）に縦書きで解説してください。

〈身体表現領域〉

企画提案型（身体表現力（朗読））：次に掲げる作品を間・抑揚などを内容から考え、試験当日に15分程度で朗読してもらいます。

太宰治著『人間失格』、宮沢賢治著『風の又三郎』（2022年度選抜の課題作品）

※面接時には、暗唱ではなく、手渡された本文を朗読してもらいます。